様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：２３５０３
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｈ０４５６６

研究課題名（和文）長期に渡る戦争による反復的Trauma体験が後年の心身に及ぼす影響に関する調査

研究課題名（英文）The study of how repetitive trauma experiences from long-term wars affect later psychological states.

研究代表者
文珠　紀久野（Monju, Kikuno）

山梨県立大学・看護学部・名誉教授

研究者番号：７０１９１０７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　12,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、長期にわたる戦乱・紛争での心的外傷（Trauma）が後年に及ぶ後遺症を明らかにし、Trauma対応可能な支援者養成方策を探索することである。東ティモール民主共和国の住民への面接調査と風景構成法、箱庭制作を活用して実施した。ケア不足のためTraumaが軽減されず残存し、気づかれず放置された心的外傷が、DV、性的虐待、暴力行為の引き金になり、依存等種々の心理的問題を引き起こしていることが示唆された。Traumaへの支援者養成ワークショップを毎年開催し、Traumaのケア支援者養成の基盤作りを行った。今後の課題として発展途上国に適した系統的な学習が必要であることが見いだされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究により、心的外傷は簡単には解消・軽減されないことが明らかとなった。内的な心理的思いやTraumaは箱庭制作といった非言語表現によって可視化できることが示唆された。Traumaの残存状態を把握するための安全な方法を見出したことが学術的意義の一つといえる。戦乱や紛争によるTraumaの軽減に寄与しうる方策としての「グループで相互に話し合う」ことや、ミニチュア玩具を置くだけで制作できる箱庭、自分の人生を語り聴いてもらう方法の有効性を見い出せたことで、戦乱・紛争等で苦しむ人々への心理的援助が可能となることが示唆されたことも学術的意義といえる上に、社会的意義でもあるといえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to find how psychological trauma from a long-term war and conflict impacts later after effects and to explore a method to train people on how to support psychological trauma. The data was collected through interviews and the administration of Landscape Montage Technique and Sand Play to Timor Leste natives. Due to a lack of trauma care, psychological trauma remains without any alleviation. The findings indicated that untreated psychological trauma triggers DV, sexual abuse, and violence, which leads to different types of psychological issues, including addictions. Providing annual workshops to train associates has established the foundations of trauma care. An issue to be addressed in the future would be the development of a systematic learning system that is suitable for developing countries' needs.

研究分野：臨床心理学

キーワード：戦乱・紛争　反復的Trauma　Traumaの後遺症　風景構成法　箱庭制作　支援者養成ワークショップ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

1. 研究開始当初の背景

長期にわたる戦乱･紛争状態にさらされると、その国の多くの住民は強い心的外傷（Trauma）を負うことが見いだされている。（文珠･文珠　2006, Monju･Monju　2007, 文珠　2013）研究対象国の東ティモール民主共和国は、戦乱等が終結し平和となった今、様々な問題（DV、性的虐待等の増加）が出現し始めている。それには、過去の Trauma が影響しているのではないかと考えられ、Trauma の残存状態を把握する必要があると思い研究に着手することとなった。また、Trauma への心理的ケアの必要性が緊迫しているが、ケアを担える人材がほとんどいない状況である。そこで、心理的ケアを実施できる人材養成が急務と思われ、実現可能で実効性の高い心理的ケアの在り方を検討するとともに、人材養成の有効な方法を見出すために、本研究を行うこととなった。

2. 研究の目的

本研究の目的の第1は、『長期に渡る戦乱･紛争時に受けた反復性の Trauma の様相を明らかにすること』に加え、平和になって約 15 年経過した現在、『国民の健康面、心理面を中心とした現状を把握し、過去に受けた Trauma の様相と最近頻発している暴力、鬱状態、対人関係等にみられる種々の問題との関連を分析検討すること』である。さらに、『可視化し難い Trauma を可視化する方策を検討し、言語化に躊躇が生じやすい Trauma を把握する方法を見いだすこと』が第3の目的である。第4の目的として、『過去の劣悪な栄養状態による成長阻害や拷問等による身体損傷、健康被害が、成人の現在の健康面に生じている影響を明らかにすること』である。さらに、『心理的ケアを実施できる支援者養成の方策を検討し、その方策の有効性を見出すこと』が第5の目的である。

3. 研究の方法

研究の対象：長期（16 世紀からの植民地時代に続き、1975 年からの過酷な侵略時代を経、戦乱が終結となった 1999 年まで）にわたり戦乱･紛争状態にあった東ティモール民主共和国（Timor Leste：TL と略）

(1) 戦乱･紛争が終結し、おおよそ 15 年が経った今、TL の現状を把握するため、TL における様々な職種の対象者（性被害と DV 被害女性への支援スタッフ･ジャーナリスト･政府関係者･1975 年からの独立闘争に関わった人･障害児のための学校の教員･1975 年からの戦乱中に独立への支援をしてきた日本人･2002 年の独立達成頃から現在まで TL に在住し、現地の人と共に働いている日本人）への半構成的インタビューを実施した。

(2) 過去の Trauma を可視化する方法として、Trauma に関する内容を言語化することで生じるフラッシュバックを防ぐため、非言語表現法を用いることとした。その一つはこれまでの人生を線で表す LIFE LINE 法、風景構成法（LMT と略）、箱庭制作を活用する方法を用いた。自分の人生を線で表す LIFE　LINE 法をもとにインタビューを実施した。対象者は 54 人（男性 16 人、女性 38 人、平均年齢 42．1歳）である。インタビュー時に健康面の調査を同時に行い、侵襲性の低い方法（身長、体重、BMI、血圧）を用いて実施した。さらに、身体面における不調に関する聞き取りも行った。

(3) 心的外傷を負った住民への心理的ケアを実施できる人材育成のためのプログラムを開発し、ケアを実践できるための基礎となる内容を含んだワークショップを毎年 3～4 日間ずつ実施した。

4. 研究成果

(1) 主な成果

①現状把握：政治・社会面では、賄賂等による政治腐敗、失業率の高さが指摘された。教育面においての問題が特に大きいと捉えられている。平和になった 2000 年以降、子ども人口が爆発的に増加し、それに対応しうる教室が不足し、2 部あるいは 3 部制での入れ替え制の授業を行わざるを得ないこと、必要な教材不足に加え、現地語（Tetun 語）ではない言語（ポルトガル語）での教授をするため、子どもたちはほとんど授業内容を理解できていないといった問題が大きいとの苦言が呈された。さらに、教員の不足に加え、教員養成が不十分なことから教員の質に問題があるといった指摘もあった。半面、ほぼ全土に電気が行き渡り、水や食糧不足の問題も解消し、インフラ整備が徐々に進み、生活面ではかなり改善が進んでいると述べられている。

②住民を対象とした調査

＊健康面：肥満と高血圧が問題とみられ、今後生活習慣病の発症者が増加するのではないかと思われる結果だった。特に、侵略時代に生まれ育ち、現在 40 代以降となった人々に、既に生活習慣病に陥っているのではないかと思われる徴候が見出された。

＊風景構成法からみられた結果：

・風景構成法は、インストラクションに従って指示された項目を1つずつ全部で 10 個描く。約 30%の人－特に過酷な侵略時代を生きてきた 40 代以降の人－は、10 項目を羅列するように小さく描き、最終的に風景となるようイメージして全体を統合する力が不十分であると思われた。川は、黒や茶色に濁っていて、内的な混乱、喪失感を表していると推測された。川と道が途中で切れている絵が多いことから、心的エネルギーを十分に放出できないままになっていることがうかがえた。動きの無い立っているだけの棒状の人が描かれ、自己像が貧弱なままになっている。川の中に石があり、流れが阻まれており、思うように生きられなかったことを表していると思われた。インストラクションには無い雲が描かれ、不安の内在が推測された。木の実や葉の落下、切り取られた枝が描かれていることが多いことから、悲哀感、絶望感、非常に辛い経験を有していることが暗示されていた。塗られた色が薄い、あるいは風景にそぐわない色が塗られていることから、内的な経験の乏しさ、あきらめ感を表していると考えられた。しかし、田は植えたばかりであったり、今から大きく育とうとしているところが描かれ、Trauma の回復や自己成長への願いや希望が表されていると思われた。

これらから、LMT を介して残存している Trauma の状態を把握することが可能となることが示唆された。

＊箱庭制作からみられた結果：置かれたミニチュア玩具の量が非常に少ないか、箱からあふれんばかり多量に置かれるという極端さがみられた。これまでの自分の人生の歩みをあらわす箱庭や、過去の爆撃等の辛い経験をあらわす箱庭が作られることが多く、Trauma が十分処理されていないことがうかがわれた。箱庭制作後、ほとんどの人が「すっきりした」「落ち着いた」「自分のことが理解できた」と述べていたことから、非言語表現法によって Trauma の様相を可視化できるだけでなく、Trauma の軽減・解消につながる心理的援助の一方法となりうることが示唆された。

＊LIFE LINE 法・インタビューからみられた結果：LIFE LINE 法のインストラクションの理解に難しさがあったと思われ、どのように自分の人生を線で表せばよいのか戸惑う人が多くみられた。インタビューを併用して、1 対1でこれまでの人生を聴取した。植民地時代（16 世紀頃～1975 年）、独立闘争の戦乱時代（1975 年～1999 年）、独立を問う住民投票後の戦乱時（1999 年）、どの人も辛く、悲しい思いをし、そのことが今も Trauma になっている。家族（特に父親）が突然連れ去られ、拷問を受けたという人が多い。姉妹がレイプされたり、自分自身も拷問を受け死ぬような体験をしている。特に、独立闘争の戦乱時代は、住民相互に疑心暗鬼とならざるを得なかったため、恐怖と不安を感じながら生活していた。爆弾の投下等の危険を避けるために、森や山に長期に渡って

隠れざるを得なかった。食料の不足により、幼い兄弟姉妹や自分の子ども達が飢餓で亡くなった。男性の多くは貧困のために学校を途中でやめざるを得なかった。女性は、学校教育を受けることができなかった。当時は、常に強い恐怖を感じていたが、生活することに精一杯で自分ではどうしようもできなかった、仕方ないことだったとあきらめ感を抱いていたと述べている。

1999 年には独立を願って住民投票に行った。その後に生じた全土が破壊される戦乱で山に避難せざるを得なかった。半面、独立できうれしかったし、平和になり落ち着くことができた。今も経済的困窮は続いている上に、悪夢を見たり、当時の拷問のことが思い出され、非常に辛いと述べる男性も多い。既婚女性から、夫たちは無為な日々を過ごし、無気力になってしまい働こうとしないから経済的に困窮し、子どもへの教育に十分なお金を掛けられないことも辛いと述べている。

インタビューを受けた対象者からは、「自分の経験を聴いてもらえたことで自分の辛さが軽減できた」、「自分のこれまでの経験が無駄でなかったことがわかった」という反応が得られた。特に重い Trauma を抱えている対象者からは、「(戦乱中) 自分の働きが独立することに大きく繋がっていることがはっきり分かった」、「(独立闘争中の) 辛い経験の意義、意味が見えてきた」と安心した表情で述べていた。

③Trauma ケアに携わる支援者養成のワークショップ

＊プログラムの開発：Trauma ケアができるために必要な学習内容、スキル等を検討し、プログラムの試案を作成した。

＊ワークショップの参加者：現在何らかの形で支援活動を実施している現地 NPO のスタッフ、精神科病院のスタッフ、障害児のための学校の教員、大学生で、12 名～25 名 (平均 14 名) の参加者である。

＊ワークショップの内容：心理的援助に必要な心理学の基礎知識、支援者自身の過去の Trauma の軽減を図るための演習、支援のためのスキルの習得のための演習を交えた内容で実施した。参加者からは、「すぐに活用できる内容である」「自分自身が心理的に安定できた」「興味のある内容でもっと学びたい」といった反応がみられた。

(2) 国内外の位置づけとインパクト

戦争・戦乱・紛争による Trauma や PTSD の研究のほとんどは、兵士が対象となっている。本研究は、戦争等の事態に遭遇せざるを得なかった住民を対象にしていること、Trauma を負った人への心理的支援のための方策を人材養成という観点から見出そうとしている点で、これまでにはない研究と位置付けられる。また、国際的にも強い関心を寄せられている。

(3) 今後の展望

本研究から、戦争や戦乱等による Trauma は容易には軽減も解消もしがたいこと、そのことにより様々な心理的な問題、DV をはじめとする人格を破壊するような問題行動の発生が生じやすくなることが見いだされた。今後、そういった問題への予防のみならず、具体的な対応方法を検討することや、今も戦争や戦乱等による後遺症に苦しむ被害者への心理的ケアを実践し、その効果を検証することを通し、Trauma 軽減につながる治療法の工夫に取り組む予定である。それに加え、心理的ケアを実践できる人材を継続的に養成する途上国に適した方法等を開発することに取り組む予定である。

(4) 予期しなかったことから得られた新たな知見

本研究の実施中、2020 年～2022 年は新型コロナウイルス蔓延により、対象国に渡航できなくなった。そのため、オンラインの活用を検討し、WhatsApp (対象国との通信が可能) を用いてのインタビューを

実施した。この方法により、種々の事情で対面のインタビューが困難な地域の人にアプローチできる可能性が見出せた。また、対象者の都合に合わせてインタビューを実施できることから、研究上の課題でもあった突然のキャンセルを防ぐことができる利点も見いだされた。

(5) 研究の限界と課題

長期にわたる植民地時代、戦乱・紛争を経験してきた人々は、学校教育を十分受ける機会を逸したことから、識字率が非常に低い。そのため、文字を用いた調査（質問紙法やアンケート調査法）や心的外傷を見出すチェックリスト等の活用が困難であった。研究への協力には非常に好意的であるが、時間の観念が非常にあいまいである国民性故に、予定が突然変更されたり、約束が守られず、調査を断念せざるを得ないことが多々あり、研究を遂行する上での限界に遭遇した。さらに、対象国では車以外の交通手段が無いこと、道路事情が良くないこと、川に橋がないため雨が降ると川を渡ることができなくなるなどの悪条件があり、首都以外に赴く調査は非常に困難であった。

TL をはじめとする発展途上国における支援者養成のためには、その国に即し、系統的で継続的学習が可能となる養成機関が求められる。養成を行える人材（教員等）を増やすためには、今回の研究で Trauma ケアを担える人材養成に参加したスタッフを核とし、彼らが自国民に教授していくシステムの構築が課題であると思われる。そのためには、養成された支援者への継続的な支援（スーパービジョン等）が必要と思われ、今後どのように実施していくべきかも課題としてみえてきた。

＜引用文献＞

・文珠紀久野・文珠幹夫：東ﾃｨﾓｰﾙ国内の抗争が子どもに与える影響、季刊東ティモール、第 23 号、14－18、2006.

・Monju Kikuno・Monju Mikio：The Impact of War on Children: A Survey of War Orphans in East Timor , World Association for Infant Mental Health 11th World Congress, 2007.

・文珠紀久野：フォーラム III「東ティモール～破壊からの復興・開発と保健」紛争による心理的問題－インタビューを通してみえてきたこと, 第 28 回日本国際保健医療学会, 2013. 11. 3. 沖縄.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 KIkuno Monju	４．巻 1
２．論文標題 Training for Trauma Care Providers in East Timor	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Dialogos,Psicologia:Perspetivas & Praticas	６．最初と最後の頁 151-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 文珠紀久野	４．巻 74
２．論文標題 東ティモールの政治社会状況を聞くーテンポ・ティモール編集長ジョゼ・ベロさんへのインタビューー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 季刊東ティモール	６．最初と最後の頁 8－12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 文珠紀久野	４．巻 75
２．論文標題 東ティモールにおける心的外傷（Trauma）-Trauma調査と軽減のための方策	５．発行年 2020年
３．雑誌名 季刊東ティモール	６．最初と最後の頁 10－16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 文珠紀久野	４．巻 70
２．論文標題 東ティモールにおける強いTrauma経験者へのアプローチ－Acbitの活動見学を通して－	５．発行年 2018年
３．雑誌名 季刊東ティモール	６．最初と最後の頁 15－19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 秦野環・文珠紀久野	４．巻 ６６
２．論文標題 東ティモールにおける健康教育のための試み－生活習慣病を中心に	５．発行年 2017年
３．雑誌名 季刊東ティモール	６．最初と最後の頁 １０-１２
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 文珠紀久野
２．発表標題 戦乱によって支援者不在となった発展途上国における心的外傷後ストレス障害への支援者養成プログラム（試案）
３．学会等名 第22回日本トラウマティック・ストレス学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 文珠紀久野
２．発表標題 「戦争によるトラウマ」を負った自国民に対し、自国民による心理的対応ができる支援者養成の試み
３．学会等名 第19回日本トラウマティック・ストレス学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 文珠紀久野
２．発表標題 戦争・紛争によるTraumaの残遺状況
３．学会等名 第18回日本トラウマティック・ストレス学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 文珠紀久野・田代あゆ美
２．発表標題 戦乱によるTraumaの軽減、解消を目指す援助者養成－東ティモールにおける自国民相互の援助活動を目指して－
３．学会等名 第17回日本トラウマティック・ストレス学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 文珠紀久野
２．発表標題 戦乱･紛争によるトラウマケア援助者養成を目指したワークショップ
３．学会等名 第16回日本トラウマティック・ストレス学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	秦野　環 (Hatano Tamaki) (00352352)	聖マリア学院大学・看護学部・准教授 (37125)	
研究分担者	小尾　栄子 (Obi Eiko) (80369503)	山梨県立大学・看護学部・講師 (23503)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関